〒181-8611 東京都三鷹市新川6-20-2　学校法人杏林学園

杏林学園 創立60周年
～学園の発展に尽くした あの人、あの時、あの言葉～

1966年、高度経済成長がピークに向かい、日本社会にエネルギーが満ち溢れていた頃、杏林学園は誕生しました。それから60年、激動する時代の要請に応えながら本学は着実に歩みを続け、発展を遂げて来ました。その足跡を辿ると、創立者の松田進勇をはじめ、多くの先人たちが学園の未来に夢や希望を託し、様々な困難を乗り越えて今の学園を作り上げたことがわかります。古きを訪ねて新しきを知る。今、創立60周年の節目に、学園の発展を支え努力を重ねた人々の言葉に耳を傾け、これを糧に未来を拓く新たなスタートを切りたいと思います。



建学の精神を実践し、100周年に向けてさらなる発展を



杏林学園 理事長
松田 剛明
Takeaki Matsuda

創立60周年を迎えて

2016年の50周年では記念式典や祝賀会が印象に残っていますが、その後の10年は本当にあっという間でした。私は2022年に理事長に就任したので、60周年は理事長として初めて迎える大きな節目です。これまで学園を築いてこられた先人や教職員、卒業生の皆さんへの感謝を改めて示すとともに、今後の学園の発展を考える重要な機会でもあります。

教育・研究・医療を支える「眞善美」の精神

建学の精神である「眞善美の探究」は、学園の教育・研究・医療活動の根幹を成す理念です。私は、「眞」は真実を追究すること、「善」は人のために尽くすこと、「美」はより良いものを目指し続けることだと考えています。

教育や研究、医療の現場において、学生や患者さん一人ひとりに思いやりを持って接すること、そしてより良い成果を追求する姿勢そのものが「眞善美」の実践です。理念は掲げるだけではなく、日々の行動の中で体現してこそ意味があります。教職員や学生がその精神を共有し、それぞれの立場で実践していくことが、学園の発展につながると考えています。

伝統の実学・人間性の教育を一層推進

本学はこれまで、実学・実践教育を通じて社会で活躍できる人材を育成してきました。この伝統を大切にしながら、今後は研究力の向上にも力を注ぎ、その成果を教育や医療の現場に還元していきます。さらに、企業や自治体との連携、国際交流も一層充実させていきたいと考えています。大学を取り巻く環境は変化し続けていますが、本学の教育・研究・診療の強みをさらに磨き、多くの人に選ばれる大学を目指します。AIやDXにも積極的に取り組みつつ、人と人との信頼やコミュニケーションを大切にし、人間性を育む教育をこれからも推進していきます。

挑戦を恐れず新たな一歩を

大学にとって学生、病院にとって患者さんは最も大切な存在です。そのために、教職員一人ひとりが互いに協力し合い、挑戦を恐れず前に進んでほしいと思います。

60周年はゴールではなく、新たなスタートです。建学の精神「眞善美の探究」を受け継ぎながら、教職員や学生とともに学園のさらなる発展を目指し、100周年に向けて歩みを進めてまいります。

あの時 あの言葉

創立以来、多くの先人たちが本学の発展を支えてきました。
さまざまな時代の節目に残された言葉から、その時々の思いと未来への志をたどります。

沿革

1966年 1月　学校法人杏林学園創立
　　杏林学園短期大学設置認可
1970年 4月　医学部開設
1970年 8月　医学部付属病院開院
1971年 4月　杏林大学付属高等看護学校開設
　　（2020年に閉校した医学部付属看護専門学校の前身）
1976年 4月　大学院医学研究科開設
1979年 4月　保健学部開設
1984年 4月　社会科学部開設（現総合政策学部）
　　大学院保健学研究科開設

【理事長】 松田進勇　1966−1988
【学　長】 福田　保　1970−1974 ▶ 山本郁夫　1974−1984 ▶ 東野俊夫　1984−1987 ▶ 松田進勇　1987−1988（短期大学長 1966−1982）


杏林学園短期大学校舎


医学部八王子校舎


外来棟と第1病棟


高等看護学校校舎


保健学部校舎


社会科学部校舎

1965

眞善美の探究
この言葉は何回聞いても
陳腐でなく、感懐を新たにした

保健学部 初代 学部長　勝目 卓朗 先生

短期大学開設にあたり文部省の担当者との間で面談が行われた。のちに勝目卓朗先生が当時を振り返り“真善美の誕生”として記した言葉。

おたくの建学の精神は何ですかと質問があった。小生、胸はどきどきしている。そこではじめて聞いたのが進勇先生の眞善美であり、さらに一国の興亡は、その国家の教育云々であった。もっともその時の眞善美は後の時期に標語化され明確化されたようなものではない。その後20年にわたり、卒業、入学式の度に聞いてきた。不思議なことに、この言葉は何回聞いても陳腐でなく、毎回、感懐を新たにした。

（『真・善・美を求めて ―松田進勇先生追悼記念文集―』抜粋）


Takuro Katsume



進勇先生と学生

私の父 松田進勇は、医学部開設後の3.4年間は、毎週土曜日に20人ほどの学生を自宅に招いて、カレーライスその他の料理でもてなし、夜遅くまで楽しくにぎやかに話し合いをし、宿泊させたりして、いわば寺子屋的な雰囲気がありました。

（杏林大学新聞 創刊号松田博青理事長インタビュー2009年2月28日）

周囲は林や畑ばかり。
狸や蛇と出くわす日常

1970年、教養課程の授業を開始した当時の八王子は、山の尾根を切り崩し、校舎の周りは林や畑ばかり。狸や蛇と出くわすのも日常だった。体育の授業も校庭の石拾いから始まったものだ。2年後に専門課程が始まった三鷹も、大学の周りは樹木が鬱蒼と茂り、道路は舗装もされておらず、革靴を履くのもためらわれた。当時の様子を知る人たちは揃ってこう話す。万事のどかなものであった。

（KYORIN Heartbeat No.3 杏林大学のあゆみ「創設から50年」より）



1969

印刷製本した書類等
積み重ねると
床から天井まで届く程であった

第二代 理事長　松田 博青 先生

医学部開設に向け、杏林大学は文部省に提出するための膨大な申請書類の作成にとりかかった。当時のことを振り返った松田博青前理事長の言葉。

（文部省は）設置理由を記載した書類の他、財産目録、第1回卒業生を出すまでの予算書、校地校舎の図面と登記簿謄本、各科目の教員の履歴書及び実印印鑑証明付きの就任承諾書、図書目録等々関係申請書を提出し、審査を受けるよう通達を出した。これら各50部を金文字の背表紙付きの印刷製本した書類等で積み重ねると床から天井まで届く程であった。開設の申請から審査、認可までわずか半年という、今では考えられないスピードである。創立者松田進勇以下、関係者は三日三晩徹夜で書類に目を通し続けた。

（KYORIN Heartbeat No.3 杏林大学のあゆみ「創設から50年」より）


Hiroharu Matsuda

1970

教育こそは
本当に人類が永遠に生き続ける
ための根本であり、生命である

創立者・初代 理事長　松田 進勇 先生

1970年5月6日、99人の新入生を迎え、医学部開学式ならびに第1回入学式が挙行された。開学にあたり、松田進勇理事長は教育への熱い思いを語り、新入生を激励した。

開学宣言

思うに、一国の文化の興隆、民族の繁栄は、いつにかかって教育にあると申して過言ではないと信じます。現代に生きる私どもは、この二十世紀の科学文明及び精神文化を後世に受け継がせる責務と義務を持っていると考えております。そしてこれを具現化する途は、いつに教育であり、教育こそは本当に人類が永遠に生き続けるための根本であり、生命であると考えております。


Shinyu Matsuda

1988年 4月　外国語学部開設
1993年 4月　大学院国際協力研究科開設
2016年 4月　井の頭キャンパス開設
2024年 4月　医学部付属杉並病院開院
2026年 4月　学園創立60周年

松田博青　1988–2022　**松田剛明　2022–**

竹内一夫　1988–1998　**長澤俊彦　1998–2010**　**跡見 裕　2010–2018**　**大瀧純一　2018–2022**　**渡邊　卓　2022–**


外国語学部校舎


八王子キャンパス（1988年頃）


井の頭キャンパス


松田進勇記念アリーナ


医学部講義棟A


医学部付属杉並病院

1984

毎日出願数をみて一喜一憂だった

社会科学部 初代 学部長　白石 孝 先生

新学部の開設には様々な苦労が伴った。受験生募集もその一つで、開学前の大きな不安を初代学部長の白石孝先生が語った言葉。


Takashi Shiraishi

当時、一番心配したのは果たして受験生が集まってくれるかどうかであった。新聞広告も十分にはできず、学部案内や募集要項の本屋での販売も医学部の実績しか引き取ってくれない―中略―松田博青理事長が丸善や紀伊國屋にこれらを置くよう直接交渉をしてくださった。私自身も八王子の大きな書店に直接もちこんだりもした。毎日出願数をみて一喜一憂だったし、よく数字の夢をみる日々であった。それでも予想以上の受験者が出願してほっとした。

（『峰の頂き遠くとも』（私家版、1991年）より抜粋）

1988

人トシテ（他者、とくに弱者を）侮ドルナ。子トシテ（親を）悲シマセルナ。学生トシテ盗ム（不正行為をする）ナ。

外国語学部 初代 学部長　伊藤 清司 先生

「教育の目的は直接的には技術や知識の習得にあるとしても、究極は好ましい人間の育成にある」人間教育を大切にした外国語学部初代学部長の伊藤清司先生が、一期生の入学式で話した言葉。


Seiji Ito

私は「人トシテ（他者、とくに弱者を）侮ドルナ。子トシテ（親を）悲シマセルナ。学生トシテ盗ム（不正行為をする）ナ」の3点を強く訴えた。杏林学園が教育方針として掲げている完成された人間の形成を目指す「眞・善・美の探究」はまずこのような具体的で卑近な心がけから始めなければならないだろう。本学部の教育はこのような日常的な営為の積み重ねによる人間性の涵養をその基盤にして進められていくであろう。

（『外国語学部20周年記念 教室の20年』より）

1988

世界のために、人のために奉仕し、尽くすことを望む

第二代 理事長　松田 博青 先生

医学部、保健学部に次いで社会科学部を設置した松田進勇先生は、その一期生の卒業を待たず逝去された。1988年3月19日の卒業式では、遺影が掲げられる中、松田博青理事長が式辞を述べた。



「いかなる社会においても不変であるべきものは『人に対する思いやり』です。卒業生の皆さまには、人に対する思いやり、謙虚な気持ちを強く持つことを私は望んでおります。諸君が来たるべき時代に、この国を背負って立ち、世界のために、人のために奉仕し、尽くすことを望んでいます。諸君が今後の人生を明るく、心豊かに、逞しく生き抜かれることを祈念し、亡き学園長・学長にかわり式辞とします」

2011

苦しみの中にこそ希望がある

杏林大学名誉博士　ドナルド・キーン 先生

2011年3月11日、東日本大震災が発生。日本中が悲しみと混乱にある中、日本に帰化・永住することを表明されたドナルド・キーン名誉博士から特別寄稿を賜った。


Donald Keene

厳しい冬の寒さにこごえる中で、より良い季節が訪れると思っても、大した慰めにはならないが、それは絶対、確実なことであるし、苦しみの中にこそ希望がある。東北にも春は訪れる。亡くなった人々への想いや、不毛の地と変わり果てた大地への悲嘆が消えるわけではない。しかし、春は希望をたずさえて来る。そして、それこそは季節がもたらす最も尊い賜物なのだ。

（杏林大学新聞6号より一部抜粋 2011年8月30日発行）

ゆかりの方々からのメッセージ

■ 杏林大学名誉学長　跡見 裕（あとみ ゆたか）

10年前、創立50周年という記念すべき年を迎え、盛大な記念式典が催されました。式典の参加者が異口同音に述べられたのは、八王子キャンパスの3学部が井の頭キャンパスに移り、4学部3研究科が一体のものとして活動できるようになったことでした。この大きな事業はまさに第2の建学であるとも言えるもので、当時の松田博青理事長、松田剛明副理事長の決断力と実行力がなければ決して完遂できなかったと言えます。また当時は文部科学省の大型プロジェクトに立て続けに採択されるなど、私も学長として様々な経験をしたことを思い出します。杏林大学の教職員が協調して前進していくと、かなり大きなことができると実感したものです。

今、少子化が進行し、昨年生まれたお子さんは70万人を切りました。このことは学校経営には逆風であり、とりわけ私学にとって厳しい状況が出現します。このような中でも杏林大学は必ずや新しい道を開拓し、着実に進んでいくだろうと信じています。理事長、学長を先頭に教職員の方々のご努力を期待して止みません。

■ 元杏林大学副学長　ポール・スノードン

CongratulationS!!　日本では、歴史や歩みといった時の流れを大切にする文化があります。そして、その数字が大きくなるほど、人々の敬意や関心も高まるように感じます。

私の母国イギリスでも、25周年や50周年、100周年などの節目は特別に祝われます。25周年はSilver Jubilee、50周年はGolden Jubileeと呼ばれ、結婚記念日にも同様の表現が使われます。

一方、日本には60周年を祝う独自の文化があります。それが「還暦」です。干支が一巡する節目を迎えた人や組織は一大偉業として尊敬されます。今年、杏林学園も還暦を迎えました。今後もますます発展されることをお祈りいたします。

※英語では祝いの言葉を “Congratulations” と複数形で表します。一つだけでは足りないほど、多くのお祝いの気持ちを込めて”S”の文字を大きくしました！

■ 元付属病院看護部長・元保健学部教授　中村 惠子（なかむら けいこ）

私が杏林へ就職したころは大学の草創期で、新しい大学として生まれようとする力を感じる時期でした。

看護部長として看護体制の整備や人材育成に取り組む一方、保健学部看護学科の設置にも関わりました。当時は教授職の確保が難しく、私自身も審査を受けることとなり、臨床研究をまとめて書類を整えたことを懐かしく思い出します。結果的に教授と看護部長を兼務するという貴重な経験をさせていただきました。

また、救命救急センター開設に携わったことも忘れられません。新卒と2・3年目の看護婦24名が配置され、すぐに研修を開始して6か月後に初代理事長進勇先生や当時副理事長の博青先生はじめ多くの医学部教授がセンターへお越しになりオープンしたことを思い出します。

杏林での経験は、その後の看護教員生活の礎となっています。杏林学園の更なる発展を北の蒼空から祈念しております。

■ 杏林大学名誉教授・元看護専門学校長　古賀 良彦（こが よしひこ）

私が本学に赴任したのはちょうど今から50年前で、医学部の一期生がめでたく卒業し、それぞれが各科で活躍をし始めた年である。それから40年、私は精神神経科で素敵な時間を過ごさせてもらった。それは、毎年入局してくる若者達に恵まれていたためである。

長い間付き合ってきて分かったことだが、彼らは学問として精神医学を学んでいるばかりでなく、社会に貢献する力を、言わば実学として積極的に獲得しているように思う。

「よく学び、よく遊べ」というが、遊びを社会の中で自身をアピールする術と考えると、彼らの多くがその能力をしっかりと備えている。

そのことも、もう少し彼らと一緒に過ごしていたいと願う理由のひとつである。

■ 元杏林学園事務局長　樋田 孝史（ひだ たかし）

私が杏林学園職員に採用されたのが、創立から6年を迎えた頃でした。以来、60周年のうち50年の長きにわたって共に過ごさせていただいたことになります。

良き時代の数多くの出来事や人との出会いが思い出されますが、私が若かりし20代の頃に経験した職員研修の思い出を記したいと思います。4月1日入職の教育職を除く新入職員全員がよみうりランドで3泊の宿泊研修を行っていました。職種問わず14、5名にグループ分けされた中へ先輩職員である私たちが一人ずつリーダーとなり、研修期間中のサポート担当として、寝食を共にしながら関わるという、今では考えにくい贅沢で貴重な体験でした。

このつながりが忘れがたく、後々キャンパス内の他部署に親戚がいるような一体感を覚えたものでした。

■ 杏林大学名誉教授・元付属病院長　岩下 光利（いわした みつとし）

私は20年間にわたり産科婦人科学教室の教授として教室運営に携わり、さらに付属病院の病院長として病院運営にも参画する機会をいただきました。病院長として、特定共同指導に際し、病院各部署が密に連携し、一丸となって対応した姿は、今も深く印象に残っております。

また、初期臨床研修マッチングにおいて杏林大学病院が常に高い人気と実績を維持していることは、教職員が一体となって質の高い医療と教育を提供してきた成果です。

激動する医療環境の中にあっても、これまで培われてきた活力と結束力を礎に、学園が今後さらに飛躍し、医療と教育の未来を照らす存在であり続けることを心より祈念いたします。

■ 杏林大学名誉教授・元保健学部長　神谷 茂（かみや しげる）

私は1994年に医学部微生物学教室（現・感染症学教室）の教授として着任し、医学部で24年間、さらに保健学部長として2年間、計26年間にわたり杏林大学に勤務いたしました。

医学部では「感染と防御」の教育を担当するとともに、ピロリ菌、マイコプラズマ、腸内細菌などに関する研究に携わりました。2005年に松田博青前理事長とともにケニア中央医学研究所との学術協定締結のためナイロビを訪れたことが、特に印象深い思い出です。

杏林学園で過ごした日々に感謝するとともに、今後もさらなる発展を遂げられることを心より祈念しております。

■ 杏林大学名誉教授　熊谷 文枝（くまがい ふみえ）

私は1988年の外国語学部設立時、15年の滞米生活を経て赴任しました。日本の大学への適応に苦労しつつも、ゼミでは英語でのディベートを重視し、「なぜ」と問う姿勢を徹底しました。難解との評判で少人数でしたが、深く学んだゼミ生は社会の一線で活躍しています。学生激励のため設立した「熊谷奨学金」の活用も嬉しく思います。

昨今、少子高齢化による文系学部の受験者減が課題です。しかし教員の方々には、自らも研究・研鑽を重ねていただきたいと思います。と同時に、学生には最高のプログラムを提供してくださるようお願いいたします。

私自身、傘寿を過ぎた今もライフワークである英書『Shrinking Japan and Regional Variations』（全7巻シリーズ、5巻まで完成）の執筆に励んでおります。

教職員・在学生の皆様が、常に学び続ける探求心を持ち、未来を築いていかれることを応援しております。

■ 元保健学部客員教授　司茂 幸英（しも ゆきひで）

学園創設の1966年に一期生として杏林短期大学に入学し、卒業後は、中央検査部、保健学部で勤務しながら2016年まで杏林学園に在籍しました。創設期の学園は教職員が一丸となって教育・研究に取り組み、活気に満ちていました。松田進勇初代学長の劇毒物の講義や、野辺地慶三先生の「健康は第一の財産」という言葉、勝目卓朗先生の「研究、研究」という姿勢は印象に残っています。

検査部で松田進勇先生の心電図検査を担当した際、指差し呼称による確認を評価されたことをきっかけに、生理検査の精度管理や安全管理に関わる仕事に注力しました。目標達成には個人の努力だけでなく、人を巻き込み協力を得る力が欠かせません。若い皆さんには、厳しい指導に直面した時こそ一度立ち止まり、相手の真意を考える姿勢を大切にしてほしいと思います。

■ 杏林大学名誉教授　馬田 啓一（うまだ けいいち）

2000年から2005年にかけてNHKのTV番組「プロジェクトX：挑戦者たち」が放送された。主題歌は中島みゆきの『地上の星』だ。目立たぬ場所で黙々と挑み続ける人々を地上の星だと歌っている。

2000年4月、私は社会科学部の入試企画委員長を任された。社会科学の概念が浸透せず、「社会科」の学部とか「社会学部」などと間違われ、社会科学部のPR活動は苦戦した。そうした中、慶應義塾大学や中央大学が新設した総合政策学部に、受験業界の注目が集まっていた。河合塾と代ゼミから「社会科学部より総合政策学部の方が、受験生へのインパクトは大きい」と言われたときの衝撃は今も忘れない。

2002年4月、社会科学部は総合政策学部に名称変更された。社会科学の知識を基礎に、「政策を立案、実行できる人材」を育成する新たな学部づくり。これが杏林版「プロジェクトX」の始まりだった。

目を閉じて馬車馬のように駆け抜けた日々を振り返れば、『地上の星』の曲が聴こえてくる。見果てぬ夢に挑み続けた学部スタッフの顔が次々と浮かび、堪らなく胸が熱くなる。

全文は、学内サイト（あんずNET）で紹介しています。